



Title	太宰治「誰」論：〈引用〉と〈解釈〉の物語として
Author(s)	秋田, 維吹
Citation	阪大近代文学研究. 2024, 22, p. 50-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95294
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

太宰治「誰」論

— 〈引用〉と〈解釈〉の物語として —

秋田 維吹

一 本稿の問題意識

本稿が対象とするのは、『知性』（一九四一・一二）に発表された太宰治の短編小説「誰」である。大学生の伊村君に「サタン」だと言われた「私」はショックを受け、その反証をつかむために「サタン」について色々調査を行う。その中で今度は自分が「悪鬼」ではないかと不安になり先輩作家を訪ねる。そこでかつて自らが書いた借金申込みの手紙を見、また郵便物を放火して回ったという「しんから悪いやつ」の話聞き、自身がただの「馬鹿」であったことを知り安堵する。しかしつい先日、「私」の小説の読者で病人である女性の病室を訪れた際、「私」としては彼女を氣遣い足早に去ったつもりだったが、その翌日彼女から、「私」の冷淡な態度に傷ついたとして「あなたは、悪魔です」という内容の手紙が来たのであった。

以上のようなあらずじを持つ本作は、奥野健男によって「前後はユーモラスな軽いタッチで書かれ小説の首尾を整えているが、聖書に触発され、神に対するサタン——悪魔というものの本質を追求しようとした作品であり、「かつ

てのキリストに対するユダのような反立法の役割という自己規定をもう一度根底から検討しようとしている」^①という見方がはやくからなされている。奥野は「悪魔」というものの本質、「自己規定」に着目するが、これに類似した姿勢は、『太宰治事典』の木村小夜による本作の整理にも確認できる。木村は本作を「自分が誰なのか他者の言葉によってはじめて気づかされる、また個人の意志ではなく関係の中の誤解が悪を胚胎せしめる可能性、といった他者との関係について問題提起されている」とし、「太宰にとつての悪を考える手だてともなる作品」とまとめている^②。他者を通じた「自分が誰なのか」という問題と「太宰にとつての悪」との関連に注目する姿勢は、「自己規定 および「悪魔」というものの本質」に注目する奥野のものを拡大させたものだとも考えられる。しかし、現在にいたるまでこういった問題に着目した論考は提出されておらず、研究の進展が大きいとは言にくい。「手だてともなる作品」という木村のやや婉曲的な言い方からもうかがえるように、本作の評価はいまだ定まっておらず、検討の余地が残されている。

一方で、太宰の創作史——とりわけこの時期の太宰と聖

書の問題を考えるにあたって本作が取り上げられることは少なくない。千葉正昭「昭和十六年、七年の太宰治と聖書」

③は、一九四一から四二年にかけて発表された聖書関連作品全体を論じるなかで、本作について以下のように述べる。すなわち、本作は「私は誰です」という自意識の問題を「聖書知識」・聖書・「諸家の説」を借りながら追求する作業であり、その結果「私」は、解決策を見出し、精神的収束を得る」のだと言う。ここにあるのは、この時期の太宰が「聖書」を用いて創作をし作家的行きづまりを解消したという伝記的な把握に従って、「誰」における「私」の問題も「聖書」および本作の物語を経て当然解消されなければならぬという見方である。やや形を変えたものとして田中良彦「太宰治と聖書——一九四二・四三年を中心に——」④や、「風の便り」の井原と木戸の作家的精神の対立の止場を見て取る中丸宣明「誰」論——昭和十六年前後の太宰の小説観をめぐって——⑤もあるが、これらの論も根底にはこの千葉の見方に類似したものがあるだろう。たしかに太宰がこの時期聖書関連の小説を多く発表したことは事実であり、聖書によって行きづまりを解消したという見方も首肯される。ただし、本作の物語内容に焦点を絞るのであれば、結末部で女性読者に「悪魔」と呼ばれる「私」の問題が、果たして解消したと言えるのだろうか。言い換えれば、「私」の問題は作家太宰の問題に結びつけられることによって等閑視されてしまっている傾向が否めないのではないか。

たしかに本作には冒頭において二十世紀のばかな作家という言葉や、先輩作家への手紙の引用において「太宰」や「治拝」という言葉があり、「私」が「太宰治」という作家であることが明らかになっている。しかし、後に述べるように本作の「私」には重要な個性が認められる。そこで、本作の内容を作家太宰の伝記的記述に結び付ける前に立ち止まって、「私」の個性と向き合う必要があるのではないかと考える。

この本稿の立場に近いものとして、遠藤祐「誰（太宰治）——問いかける物語」⑥がある。遠藤は本作を「太宰ならぬ語り手による〈私〉の物語」として、太宰と切り離れたうえで語り手「私」の内面的状態が深刻なものであったことを強調する。これも、「私」に注目することによって伝記的な記述との接続を留保する試みとして位置づけられよう。しかし、「秋の一夜」の出来ごとを招いた〈私〉の情態が、語るいまでも生々しい印象をとどめている」とする遠藤論は、「私」の情態の内実や原因を明らかにしていない。そしてそれは直接書かれていない以上テキストから導出するのはおそらく困難である。であれば、その空白はまさに太宰の伝記的記述——「作家的行きづまり」が代入される余地となってしまう。つまり、遠藤論による「私」の内面を重視した分析は、かえって「私」と作家太宰とを結びつける私小説的な読みを呼び込んでしまう可能性がある。本作において「私」の内面への分析は、このような陥穽を生み出しかねない。

そこで、本稿では別の観点から語り手「私」に注目し、本作の分析を行っていきたい。具体的には、「私」の語りの様相および読者としての性格に注目する。というのも、本作の語りには引用部が多く、「私」が聖書関連の書物を多く読む読者であることが示されているからである。本稿では、このようにテクストより読書をする具体的な身体を想定できる人物を「具体的読者」と呼ぶことにする。これは、実際に小説を読む読者や、作中において「君」や「読者」などと呼ばけられるような、テクストからは具体的な身体が想定できない「抽象的読者」とは区別する意図による（なお、必要に応じて前者を「作外の「抽象的読者」、後者を「作中の「抽象的読者」と呼ぶ」ととする）。

では、本稿の問題意識をより明確に示すため、本作の冒頭において「引用」⑧される聖書の記述を見てみよう。

イエス其の弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々に出でゆき、途にて弟子たちに問ひて言ひたまふ「人々は我を誰と言ふか」答へて言ふ「バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は預言者の一人」また問ひ給ふ「なんぢらは何を誰と言ふか」ペテロ答へて言ふ「なんぢはキリスト、神の子なり」(マルコ八章一七)

たいへん危いところである。イエスは其の苦惱の果に、自己を見失ひ、不安のあまり無智文盲の弟子たちに向ひ「私は誰です」といふ異状な質問を発してゐるのである。無智文盲の弟子たちの答一つに頼らうとし

てゐるのである。けれども、ペテロは信じてゐた。愚直に信じてゐた。イエスが神の子である事を信じてゐた。だから平気で答へた。イエスは、弟子に教へられたいよいよ深く御自身の宿命を知つた。

二十世紀のばかな作家の身の上に於いても、これに似た思ひ出があるのだ。けれども、結果はまるで違つてゐる。

「私」による「引用」は、「私」が聖書をどのように読んだかを示す手がかりである。そしてここには「私」の「具体的読者」としての特徴がよくあらわれている。それは、表現の類似より「私」が読んだことが想定される大正改訳版の聖書本文と見比べることによってより明確になるだろう。以下に聖書本文を引用する。

イエス其の弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々に出でゆき、途にて弟子たちに問ひて言ひたまふ「人々は我を誰と言ふか」答へて言ふ「バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は預言者の一人」また問ひ給ふ「なんぢらは何を誰と言ふか」ペテロ答へて言ふ「なんぢはキリストなり」イエス己がことを誰にも告ぐなど彼らを戒め給ふ。斯て人の子の必ず多くの苦難をうけらるべし。長老・祭司長・学者らに棄てられ、かつ殺され、三日の後に甦へるべき事を教へはじめ、此の事をあらはに語り給ふ。(8)

これらと比較すると、次のことに気が付く。第一に、傍線部に示した通り、聖書本文では「なんぢはキリストなり」とされている部分を「私」は「なんぢはキリスト、神の子なり」と表現を変えている点。「マルコ八章一七」とその直後に引用元を明確に指定していることもあり、この異同には気が付きやすい。そして第二に、波線部で示したような箇所を取り上げずに文脈を切り離して「引用」し、独自の「解釈」を行ってしまう点である。二重傍線部で示した「イエスは、弟子に教へられ」ることで「御自身の宿命を知った」という「私」の「解釈」は、聖書本文の波線部にあるような、イエスが自身の先のことを熟知した上で弟子たちにそれを予言する内容とは明らかに矛盾するのである。このように見れば「私」には、恣意的に「引用」をし、その「引用」に立脚した恣意的な「解釈」を行ってしまうという特徴が認められる。この箇所について「自身の情態に據ってイエスをみつめていることは、確かだろう」という遠藤の指摘^⑨を踏まえれば、「私」は、自身の状況や自身への「解釈」をもとにして恣意的な「引用」を行い、またそれを「解釈」する人物ということになるだろう。

実は、この箇所の「私」による「引用」や「解釈」が一般的ではないということはいくつかの先行研究によつて指摘されていた。しかし、その一つである前掲中丸論では「意図的な〈不逞な空想〉」^⑩として太宰のよく用いた創作方法である翻案という文脈に意味づけられ、奥野政元「誰

と塚本虎二「イエス伝研究」^⑪では「太宰がいかに深く塚本のイエス像を捉え得ていたかが、よく示されている」と言う。ここで「私」のあり方は、これまで蓄積されてきた従来の作家・太宰の特徴のあらわれだと見なされている。つまり、作家を見る視線によつてこうした「私」の個性は看過されてしまっているのである。

演繹法的に「私」に作家の特徴を代入するこれらの論法は、「私」だけでなく太宰の新たな可能性を見えにくくしてしまうおそれがある。繰り返すが、本作に必要なのは「私」の個性を作家と結びつけずに見つめ直すことである。作家の問題はその作業のあとに検討されても遅くはないはずだ。本稿では以降第二節にて、このような「私」の「具体的読者」としての個性を重視しながら作品の構造・展開を分析していく。そのあと第三節にて他の「具体的読者」としての先輩作家や女性読者とのかわりについて論じていく。それによつて浮かび上がるのは、本作の「引用」と「解釈」を中心とした作品としての評価の可能性である。

二 「私」の「引用」と「解釈」

本作の物語内容をもう一度確認しよう。本作は、①学生にサタンと言われる、②反証をつかむためにサタン調査を行う、③自身が「悪鬼」ではないかと不安に思い先輩作家を訪ねる、④女性読者とのやり取り及び手紙を受け取る、というように大きく四つの場面に分けて把握することがで

きる。そして、場面①〜③までは、先に見たような、「私」の自身に対する〈解釈〉や主張したい物事に合わせて恣意的な〈引用〉を行つてしまつてゐる様子を見ることができ

二・一 他文献からの〈引用〉と〈解釈〉

ここでは、他文献からの直接引用の形となつてゐる箇所について着目する。先に挙げた聖書の引用の他にも、恣意的な〈引用〉と〈解釈〉がなされてゐると考えられる場面がいくつかある。それらを、引用元と比較しながら検討していきたい。

まず、「私が決してサタンでないといふ反証」の決め手となつてゐる「塚本虎二氏の説」の〈引用〉と〈解釈〉について注目してみよう。少々長くなるが、作品本文を引用する。

以下は日本に於ける唯一の信ずべき神学者、塚本虎二氏の説であるが、「名称に依つても、ほぼ推察できるやうに、新約のサタンは或る意味に於いて神と対立してゐる。即ち一つの王国をもつて之を支配し、神と同じく召使たちをもつてゐる。悪鬼どもが彼の手下である。その国が何処にあるかは明瞭でない。天と地の中間（エペソ二・二）のやうでもあり、天の処（同六・十二）といふ場所か、または、地の底（黙示九・

十一、二〇・一以下）らしくもある。とにかく彼は此の地上を支配し、出来る限りの悪を人に加へようとしてゐる。彼は人を支配し、人は生れながらにして彼の権力の下にある。この故に『この世の君』であり、『この世の神』であつて、彼は国々の凡ての権威と栄華をもつてゐる。」

ここに於いて、かの落第生伊村君の説は、完膚無き迄に論破せられたわけである。「中略」私は、サタンでなかつたのである。へんな言ひかたであるが、私は、サタンほど偉くはない。この世の君であり、この世の神であつて、彼は国々の凡ての権威と栄華をもつてゐるのださうであるが、とんでも無い事だ。私は、三鷹の薄汚いおでんやに於いても軽蔑せられ、権威どころか、おでんやの女中さんに叱られてまごまごしてゐる。私は、サタンほどの大物でなかつた。

続けて、この箇所がよつてゐる塚本虎二「新約聖書に於けるサタン」『聖書知識』一九四一・九を以下に示す。

名称によつてもほぼ推察出来るやうに、新約のサタンは或る意味に於て神と対立してゐる。即ち一つの王国を有つてこれを支配し（マタイ二二・二六）、神と同じく使達を有つてゐる（同二五・四）。悪鬼共が彼の手下である。その国が何処にあるかは明瞭でない。天と地の中間のやうでもあり（エペソ二・二）、「天の

処」(同六・一二)、地の底らしくもある(黙示九・一、二〇・一以下)。兎に角彼はこの地上を支配し、出来る限りの悪を人に加へようとしてゐる。この故に「この世の君」であり、「この世の神」であつて、彼は国々の凡ての権威と栄華とを有つてゐる。但し、これは神から委ねられたものであることを彼自身が認めてゐる(ルカ四・六)。

彼は人を支配し、人は生れながらにして彼の権力の中にある(行伝二六・一八、コロサイ一・一二)

一見すれば塚本の記事はそのまま引き写されているかのようだが、詳細に見れば表現が少なからず異なっていることが分かる。加えて、重要なのは波線部で示した部分を引用していないということだ。ここで「私」はサタンの性質を調査し、それを偉大なものとすることによって「私」との差異を示そうという戦略を取っているのだが、その目的においては、神よりもサタンの威光を小さなものであるとする波線部は適合しない。ゆえに「私」はこの部分を無視するのである(120)。

「私」は、「こんな学術的な事を言ふのは甚だてれくさい」と言い、「学術的」を自覚している。しかし、右で見たような「私」による(引用)は到底「学術的」とは言えず、その恣意性は明らかである。

次に、場面③における、自身を「悪鬼」ではないかと疑い始め聖書辞典を読む(引用)する箇所を見よう。

私を、その召使の悪鬼だと言はうとして、ものを知らぬ悲しき、サタンだと言つてしまつたのかも知れない。聖書辞典に依ると、「悪鬼とは、サタンに追従して共に墮落し靈物にして、人を怨み之を汚さんとする心つよく、其数多し」とある。甚だ、いやらしいものである。わが名はレギオン、我ら多きが故なりなどと嘯いて、キリストに叱られ、あわてて二千匹の豚の群に乗りうつり転げる如く遁走し、崖から落ちて海に溺れたのも、こいつらである。だらしの無い奴である。どうも似てゐる。似てゐるやうだ。サタンにお追従を言ふところなぞ、そつくりぢやないか。私の不安は極点にまで達した。

すでに先行研究においてこの箇所がヘボン・山本秀煌編『聖書辞典』(聚芳閣、一九二六・二)によつてゐることは指摘されている(123)。以下、同書の項目「アクキ(悪鬼)」の記事を引用する。

悪魔の罪を犯せし時彼にくみして共に墮落し靈物にして其数多し(可五ノ九)彼等も固聖き天使なりしがだらくしていと悪き者となり、人を怨み之を害せんと欲するの心を懐き、殊にキリストの時代には人に憑て之をなやませり、されど神の許なくばしかならずあはざるなり(可五ノ十二、十三)

たしかに作者がこれを読んで創作したことは表現の類似から見ても確実だと思われるが、しかしここは先に見た聖書や「塚本虎二氏の説」とは異なり、本文では鉤括弧等がなく固有名詞が無いため「私」が同書を読んでいたと考えることはできない。

ただし、傍線部を見れば「私」がズレた〈解釈〉をしてしまっていることは指摘できるだろう。傍線部にある「追従」は、同時代の国語辞典『大言海』（大槻文彦、富山房一九三二―三三）では「人ノ後ニ服キ従フコト。コビヘツラフコト。オモネルコト。」と説明されている。ここには意味上の懸隔があるため、追従①「人ノ後ニ服キ従フコト」、追従②「コビヘツラフコト・オモネルコト」と整理した上で改めて本文を見る。すると、聖書辞典内の記事として引用されている「追従」の意味は、後ろに「共に」が続くことや、ヘボン・山本編『聖書辞典』では「くみして」という表現が使われていたりすることを参考にしても、追従①の方が近いだろう。ところが、「私」はこれをお追従を言ふ」という追従②の方の意味で〈解釈〉してしまっているのである。そしてこの〈解釈〉のズレが「私」と悪鬼との類似点をより確実なものとし、「私」をして先輩宅に駆けこませるのであった。

このように「私」は自身への〈解釈〉や状況に応じた（引用・〈解釈〉）をしてしまうのであり、その〈解釈〉にもズレが生まれている様相を確認することができる。そして、この傾向は先輩作家から「しんから悪い人」の話を聴く場

面にも見られる。

「怒るなよ。君は、すぐ怒るからいけない。君がいま人のあやまちを非難する事が出来ないとか何とかキリストみたいに立派な事を言ふもんだから、ちよつと、厭味を言つてみたんだ。しんから悪い人なんて見た事が無いと君は言ふけれども、僕は見た事がある。二、三年前に新聞で読んだ事がある。ポストにマツチの火を投げ入れて、ポストの中の郵便物を燃やして喜んでゐる男があつた。狂人ではない。目的の無い遊戯なんだ。毎日、毎日、あちこちのポストの中の郵便物を焼いて歩いた。」

「それあ、ひどい。」そいつは、悪魔だ。みぢんも同情の余地が無い。しんから悪いやつだ。そんな奴を見つけたら、私だつて滅茶滅茶にぶん殴つてやる事が出来る。死刑以上の刑罰を与へよ。そいつは、悪魔だ。それに較べたら、私はやつぱり、ただの「馬鹿」であつた。

ここで「私」は先輩作家から「しんから悪い人」の例としてポストの中の郵便物を焼いて歩いた男の話をお聴く。「私」はこれを受けて、傍線部のように「そいつは、悪魔だ」と繰り返して、「死刑以上の刑罰を与へよ」として過剰に〈解釈〉する¹⁴。それは「私」が、自分自身を「悪魔」ではない「ただの馬鹿」であると見なしたいがためにほ

かならない。

つまり「私」は、先輩作家の新聞記事に対する〈解釈〉を受けつつ、それを拡大する形で、自分自身の状況に都合のよいように恣意的な〈解釈〉を行ったのである。結果として、「死刑以上の刑罰を与えよ」と一般的な見方からはかなりズレた見方をなしてしまっている。

ここには、二点の示唆がある。第一に、「私」が先輩の〈解釈〉を受けて、それを拡大する形で自身の〈解釈〉を展開している点である。〈引用〉と〈解釈〉の問題は他者とのかわりのなかで重層的になっていく。これについては次節に譲る。第二に、ここで「私」が〈引用〉したのは先輩の口述であるという点である。つまり、〈引用〉は直接引用の形に限定されていない。次項に見るように、本作において〈引用〉・〈解釈〉はより抽象的なものをも対象とする。

二・二 「私」自身への〈引用〉と〈解釈〉

これまでに示してきた通り、「私」は自身の状況や自身への〈解釈〉に立脚しつつ、書籍や先輩の口述を恣意的に——少なからぬズレをはらみながら〈引用〉・〈解釈〉する人物である。

ただ、対象はそれらだけではない。本作の物語内容は二十世紀のばかな作家の身の上に於いても、これに似た思ひ出があるのだ」として語られ始める。つまり、本作は過去の「私」の出来事を「思ひ出」として対象化するところか

ら始まるのである。これは「私」による〈引用〉と〈解釈〉の営為が過去の「私」に対しても行われているとも言い換えられよう。そして、「私」の〈引用〉と〈解釈〉における恣意性はここでもあらわれていく。

語る「私」は「思ひ出」の中の語られる「私」について、「その時期に於いて私は、自分を完全に見失つてゐたのだ。自分が誰だかわからなかつた」と言う。しかし、本当に「私」は自分を見失つていたのかどうか、疑わしく思われる節がある。以下では、このことについて考えていく。

先述のように「私」は伊村君に「サタン」と呼ばれて「私」||「サタン」ではないかという疑惑を抱くが、調査の対象となるのは「私」ではなく「サタン」であった。つまりここにあるのは「サタン」から「私」らしからぬ部分を見出すことによつて「私」が決してサタンでないといふ反証をはつきり掴「もうという戦略である。これは「私」らしい部分——「私」に対する何らかの〈解釈〉が存在していないと不可能な行為であるはずだ。以下の記述は、この「私」の「私」に対する〈解釈〉がどのようなものかを示している。

或る神学者の説に依ると、サタンの正体は天使であつて、天使が墮落するとサタンといふものになるのだといふ事であるが、なんだか話が、うますぎる。サタンと天使が同族であるといふやうな事は、危険思想である。私には、サタンがそんな可愛らしい河童みたい

なものだとは、どうしても考へられない。

サタンは、神と戦つても、なかなか負けぬくらいに剛猛な大魔王である。私がサタンだなんて、伊村も馬鹿な事を言つたものである。

ここを見れば、「私」には元から「サタン」が「剛猛な大魔王である」という〈解釈〉があつたのにもかかわらず、「私」と「サタン」が結びつくことを契機として、「サタン」側に、「可愛らしい河童みたいなもの」や「天使」が「墮落」した者という〈解釈〉可能性が打ち出されていることが分かる。「サタン」は「私」という項を介してはじめて「可愛らしい河童みたいなもの」と〈解釈〉される余地が生じているのである。そして、このような「サタン」||「私」||「可愛らしい河童みたいなもの」という図式が成立するのだとすれば、「私」は「私」に対して「可愛らしい河童みたいなもの」と〈解釈〉している、ということになるだろう。なお、「家の者」の「不精者」という評価もこれに近いものとしてあつたと思われる。「程度が過ぎると悪魔みたいに見える来」る可能性のある「不精者」は、「墮落」し「サタン」になる可能性のある「天使」と似ているからだ。

このように、「私」は「サタン」と呼ばれたことで多少の不安を抱いていたとしても、ある程度「私」への〈解釈〉を有しており、「自分を完全に見失つてゐる」ように思われぬ。

「私」の調査が「私」自身へと向かうようになるのは、場

面③に入つてからである。

けれども私は、絶対にサタンでない。この世の権威も栄華も持つてゐない。伊村君は言ひ違ひしたのだ。かれは落第生で、不勉強家であるから、サタンといふ言葉の真意を知らず、ただ、わるい人といふ意味でその言葉を使つたのに違ひない。私は、わるい人であらうか、それを、きつぱり否定できるほどわたしには自信が無かつた。

ここでは、調査を通してサタンへの〈解釈〉が定立し、「私」が「サタン」でないことが証明されたときに、かえつて伊村君の「言ひ違ひ」の可能性が意識されている。それを通して「私」への〈解釈〉が揺らぎ始め、「私」が「悪い人」である〈解釈〉可能性が浮かび上がる。ここにおいてはじめて「私」は「自分を完全に見失つてゐる」ようなそぶりを始めるのである。

以上のように見れば、「私」は「自分を」「見失つてゐる」なかつたころの過去の「私」を「自分を完全に見失つてゐた」「私」として「引用」・〈解釈〉していると言うことができる。これは、書物や新聞記事の話を恣意的に「引用」・〈解釈〉する「私」の習性が、自分自身の過去を対象とする場合においてもあらわれていると考へてよいだろう。

もちろん、冒頭において「人々は我を誰と云ふか」と問う場面は一見すれば「私」が「自分を」「見失つてゐた」こ

との証拠のようにうつるが、聖書の記述の型に当てはめるように書かれたこの出来事がこの通りに起こったとは考えられない。むしろ、ここに聖書への「解釈」をもとに自身の過去を恣意的に〈引用〉してしまう「私」の姿勢を見たい。前掲した「自身の情態に據ってイエスをみつめていることは、確かだろう」という遠藤の言葉になぞらえれば、ここでは同時に、イエスの情態に據って過去の自身をみつめてもいるのである。

また、そもそも、「私」が「二十世紀のばかな作家の身の上」に於いても、これに似た思ひ出があるのだ」として自身の過去を「思ひ出」として対象化すること自体、はじめから無理があるのではないか。次にこのことについて考えていきたい。

安藤宏は「思ひ出」(『海豹』一九三三・四)を論じる中で、「人は郷愁を通して過去と現在との距離(断層)そのものに想いを馳せ、二つの時間の対比それ自体に感慨を抱くのである」(15)と述べる。過去の自分を「思ひ出」として語るには、語る今の「私」と語られる過去の「私」との間に「距離(断層)」があることが前提とされる。

本作の「私」は「その時期に於いて私は、自分を完全に見失つてゐたのだ」と言う。この言い方から、苦悩していた過去の「私」を対象化する、それを克服した現在の語る「私」の姿を想定することができる。つまり、「私」はここで、苦悩する過去／克服した現在というように、「私」の性質上の「距離(断層)」に基づいて、過去を現在から切り離

しているのである。であれば、「私」も「思ひ出」を語るために必要な「距離(断層)」の存在を示していると言える。しかし、この「私」が示す「距離(断層)」は、語りを進めるうちに虚妄であることが示されていくことになる。

それは、本作の時間軸および語る現在の「私」の位置を整理してみれば明らかとなる。「私」はある「秋の一夜」に伊村君から「サタン」と呼ばれたのち「一箇月くらゐ」サタンの調査を行う。それにより「別の変な不安が湧いて出」、「或る先輩のお宅へ駆けつけ」る。「その日から四、五日間は、胸の内もからりとしてゐたのであるが」、「つい先日、私は、またもや、悪魔! と呼ばれた」とあり、「後日談は無」く語り手の現在時に至る。これによって、過去のものとして語られていた出来事は、実際には現在まで連続性を持つていくことが分かる。

加えて、女性読者に「悪魔!」と呼ばれた「私」が、それを「一生、私につきまとふ思想であらうか」と考えていることも見逃せない。ある「秋の一夜」に「サタン」と呼ばれてから起こり始めた疑惑は、「一生」とする限り語る現在においても解消されているとは思われない。とすれば、過去の「私」が有していたとされる一連の苦悩は、語る「私」以上の現在まで続いていることが分かる。

以上のように見れば、「思ひ出」と語る現在との間に「距離(断層)」の存在を認めることはできない。逆に言えば、「私」は「距離(断層)」の無いところから無理に「距離(断層)」を見出し、「思ひ出」として語っていた、ということ

になる。このことは、本作冒頭の聖書の「引用」において後部を切り離して「引用」・「解釈」をしていたことと相似的である。「私」は過去の「私」自身に対しても恣意的に「引用」・「解釈」しようとしているのだ。

総じて「私」は「私」への「解釈」に立脚して種々の書を恣意的に「引用」・「解釈」する存在だが、それだけでなく、過去の自分自身を恣意的に「引用」・「解釈」する存在でもあった。本作は、「私」によるこのようないかがわしい「引用」と「解釈」の営為によって構成されているのである。

三 他者とのかわりの中の「引用」と「解釈」

ここまで、「私」個人における「引用」と「解釈」の様相を中心に見てきた。そして、先にも触れたように、この「引用」と「解釈」は、他の「具体的読者」とのかかわりのなかで発展を示していく。

三・一 先輩の朱筆

——「引用」と「解釈」の連鎖と可視化

本作には、「引用」と「解釈」の重層化を可視的にあらわした箇所がある。過去に先輩に送った手紙と、先輩がそれに朱筆を加えたものとを並べて掲げる箇所がそれである。それぞれの冒頭の部分を引用する。

——〇〇兄。生涯にいちどのおねがひがございませう。八方手をつくしたのですが、よい方法がなく、五六回、巻紙を出したり、ひっこめたりして、やつと書きます。この辺の気持ちお察し下さい。

——〇〇兄。生涯にいちど（人間のいかなる行為も、生涯にいちどぎりのもの也）のおねがひがございませう。八方手をつくしたのですが（まづ、三四人にも出したか）よい方法がなく、五六回、巻紙を出したり、ひっこめたりして（この辺は真実ならん）やつと書きます。この辺の気持ちお察し下さい（察しはつくが、すこし変である）

書き込みのないものとするものそれぞれの全文を示すこの特徴的な箇所は、しかし、先行研究ではほとんど注目がなされていなかった。たしかに、「悪」や「自己規定」、あるいは聖書といった問題に焦点を当てる場合、この手紙の扱いは難しい。ただし、これまで本稿が述べてきたような「引用」と「解釈」という問題に接続すれば、この部分の意義も見えてくると思われる。

ここでは「借金申し込みの手紙」という前者のテキストを先輩が読みⅡ「引用」し、「解釈」を朱筆の形で加える。その結果生まれたのが後者のテキストである。そしてその朱筆入りの手紙を「私」が読みⅡ「引用」し、「僕の文章は、

思つてゐた程でも無かつた」と印象の変化―新たな「解釈」を述べる。つまり、(二)であらわされているのは複数の「具体的読者」によって「引用」と「解釈」が連鎖していくプロセスにほかならない。

「借金申し込みの手紙」を先輩が「引用」・「解釈」したものととしての「朱筆入りの手紙」を「引用」・「解釈」する「私」。さらに加えれば、この重層的な連鎖は、「誰」を読む「作外の「抽象的読者」」の存在によってさらに連なっていくことになるだろう。このことは、次項に示す女性読者の件でも示されていると思われる。

三・二 女性読者——「引用」と「解釈」のズレ

本作にはもう一人「具体的読者」が登場する。女性読者である。そして、彼女も「私」同様、恣意的に「引用」と「解釈」を施してしまう存在として描かれている。かなり紙幅を費やすが、女性読者と対面する場面を以下に引用する。

私は、二日も三日も考へた。その女の人は、きつと綺麗な夢を見てゐるのに違ひない。私の赤黒い変な顔を見ると、あまりの事に悶絶するかも知れない。「中略」できれば私は、マスクでも掛けて逢ひたかつた女のひとからは次々と手紙が来る。正直に言へば、私はいつのまにか、その人に愛情を感じてゐた。たう

とう先日、私は一ばんいい着物を着て、病院をおとづれた。死ぬる程の緊張であつた。病室の戸口に立つて、お大事になさい、と一こと言つて、あかるく笑つて、さうして直ぐに別れよう。それが一ばん綺麗な印象を与へるだらう。私は、そのとほりに実行した。病室には菊の花が三つ。女のひとは、おやと思ふほど美しかつた。青いタオルの寝巻に、銘仙の羽織をひつかけて、ベッドに腰かけて笑つてゐた。病人の感じは少しも無かつた。

「お大事に。」と言つて、精一ぱい私も美しく笑つたつもりだ。これでよし、永くまごついてゐると、相手を無慙に傷つける。私は素早く別れたのである。帰る途中、つまらない思ひであつた。相手の夢をいたはるといふ事は、淋しい事だと思つた。

あくる日、手紙が来たのである。
「生れて、二十三年になりますけれども、今日ほどの恥辱を受けた事はございませぬ。私がどんな思ひであなたをお待ちしてゐたか、ご存じでせうか。あなたは私の顔を見るなり、くるりと背を向けてお帰りになりました。私のまづしい病室と、よこれて醜い病人の姿に幻滅して、閉口してお帰りになりました。あなたは私を雑巾みたいに軽蔑なさつた。「中略」あなたは、悪魔です。」

「私」は、「私の赤黒い変な顔」という自分自身への「解

四 まとめ

以上、「私」を作家太宰と結びつけずに、その〈具体的読者〉としての個性を重視して分析することで、本作の新たな可能性が見出せたのではないかと思う。

本稿を整理すれば、次のようになる。本作の語り手「私」は自身の状況や自身への〈解釈〉に立脚して、文献を恣意的に〈引用〉・〈解釈〉する〈具体的読者〉であった。同時に、過去の自分自身を恣意的に〈引用〉・〈解釈〉する存在でもあった。本作ではこの「私」という個人による重層的な〈引用〉と〈解釈〉のプロセスが示されていると同時に、それ自体が物語の展開を支えてもいた。また、本作では「私」と先輩作家や女性読者という他の〈具体的読者〉とのかわりにおいて〈引用〉と〈解釈〉の連鎖が大小さまざまにズレをほらみながら展開されてもいた。さらに、「作外の〈抽象的読者〉」は本作を読むことによってこの連鎖に巻き込まれていく。

このように見れば、本作は様々な「読者」による〈引用〉と〈解釈〉によって構成された物語であると同時に、〈引用〉と〈解釈〉の過程それ自体を示すというメタテクスト的な側面も有していると考えられよう。

また逆説的な言い方になるが、「私」を太宰に結びつけることによつて、帰納法的に、次のような太宰の姿も見えてくる。すなわち、作者は〈具体的読者〉たち——作者自身を擬した人物である「私」を含めて——を、ズレをほら

釈によつて、すぐに別れるという行動が「一ばん綺麗な印象を与へるだらう」と考え「そのとほりに実行」する。これに対して、女性自身を「私のまづしい病室と、よこれて醜い病人の姿」と〈解釈〉したうえで、「私」の言動を〈引用〉し「あなたは私を雑巾みたいに軽蔑なさつた」と〈解釈〉する。これによつて、「私」の「一ばん綺麗な印象を与へるだらう」という意図が、他人による〈引用〉と〈解釈〉によつていかにズレていくのかということがあらわされている。

自分自身に対する〈解釈〉に立脚した恣意的な〈引用〉と〈解釈〉。女性読者によるこの〈引用〉と〈解釈〉の様相は、「私」が行うそれとかなり似ていることも指摘できるだろう。ここで示されているのも、〈具体的読者〉たちによる、ズレを伴つた〈引用〉と〈解釈〉の連鎖なのである。

さらに、この女性の〈解釈〉が書かれた手紙を「私」は例によつて恣意的に〈引用〉しているだろうことが、手紙内に中略を施していることから示唆されている。この連鎖は、ここで中略されたテキストを読む「作外の〈抽象的読者〉」によつて、さらに連なっていく。

総じて、先輩作家および女性読者との場面を整理すると、以下のようになる。すなわち、「私」の内部で行われていた恣意的な〈引用〉と〈解釈〉は、先輩作家や女性読者という他の〈具体的読者〉たちとのかかわりによつて外部との接点を持ち、連鎖していく。そしてその連鎖は、「作外の〈抽象的読者〉」をも射程に含んでいるのである。

み得る者として「引用」・「解釈」をさせ、「引用」と「解釈」の物語を創作したのである。このことは、この時期の太宰の関心および創作のモチーフの一つに読者やその解釈といたった問題があったことを示唆しているだろう。加えてそれは、太宰の創作方法としての「具体的読者」に注目する可能性を浮かび上がらせるものでもある。が、それを確認するには太宰の他の作品を同様の視点から分析し、論を蓄積していく必要がある。今後の課題としたい。

注

- (1) 奥野健男「解説」『太宰治全集 第四巻』筑摩書房、一九六二・六
- (2) 木村小夜「誰」『太宰治事典』東郷克美編、学燈社、一九九四・五
- (3) 千葉正昭「昭和十六年、七年前後の太宰治と聖書」『日本近代文学』一九八七・一〇
- (4) 田中良彦「太宰治と聖書——一九四二・四三年を中心に——」『太宰治研究1』和泉書院、二〇〇三・六
- (5) 中丸宣明「誰」論「昭和十六年前後の太宰の小説観をめぐって」『太宰治研究7』和泉書院、二〇〇〇・二
- (6) 遠藤祐「誰」(太宰治)——問いかける物語『学苑』二〇〇〇・九
- (7) 本作の「具体的読者」——「私」・先輩作家・女性読者——が行う引用と解釈を以降「引用」・「解釈」と表記することとする。

(8) 大正改訂版「マルコ伝福音書 第八章二七・二九。『新約聖書 改訂』(一九一九、大英国北英国聖書会社)より引用。

(9) 注6前掲論

(10) 注5前掲論

(11) 奥野政元「誰」と塚本虎二「イエス伝研究」『太宰治研究20』和泉書院、二〇二二・五

(12) 奥野政元「聖書辞典」(長野秀樹・花田俊典編「太宰治の系譜学」、『叙説』一九九五・一)はこのことに触れているが、「太宰のサタンあるいはその手下の悪鬼は、神とは無関係に存在し得るものとなる」として、塚本と太宰のサタン観の差異として回収してしまうため、これを「私」固有の恣意性と読む本稿の議論とは一線を画する。

(13) 注12前掲論

(14) ポストに煙草の吸殻を投げ込まれたことで郵便物が燃やされたという実際に起きた事件の記事「往來のポストへ火を投入して焼く」『東京朝日新聞』一九一九・二・一八、七面を見ると、「故意でやったとすれば場合によってはこの悪戯者は刑法上の犯人にもなり得る、あまりひどすぎる悪戯である」とある。これを参考にしても、「私」の「解釈」が過剰であることは明白である。

(15) 安藤宏「回想という方法——「思ひ出」論」『太宰治論』、東京大学出版会、二〇二二・一一

※作品本文の引用は『太宰治全集5』筑摩書房、一九九八・八)によった。同書も含めて、引用文内の傍線、二重傍線、

波線は全て引用者による。また、引用文中の「」は引用者による補足である。

(あきたいぶき／本学大学院博士前期課程)